

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：12608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05559・19K20769

研究課題名（和文）戦中／戦後日本の映像メディアにおける 子供 の表象

研究課題名（英文）The Representation of "Children" in Visual Media during Wartime/Postwar Japan

研究代表者

北村 匡平 (Kitamura, Kyohhei)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：70826502

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1940-50年代の日本映画において「子供」がいかにかに表象され、どのように受容されたのかを歴史的に調査することによって、戦時期のナショナリズムや戦後民主主義の思想体系に「子供」がどのように組み込まれていったのかを明らかにすることを目的とする研究である。

戦前から戦時中の一次資料のアーカイブを進めると同時に、「子供」について書かれた文献や雑誌の記事の調査をした。とりわけ戦中に「子供」を生き生きと捉え、独特な表現を達成した清水宏映画を分析した。その研究成果は日本映画学会において「メディアにおける戦後民主主義のイメージ：子供はいかに語られたのか」というタイトルで研究発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の時期における映画と思想の関係は、プロパガンダ研究や占領政策の視点から研究され、特にジェンダー論の文脈においては女性表象が着目されてきた。本研究ではジェンダー化される前の「無垢」な子供が、総力戦体制や戦後民主主義の伝達のためのイデオロギーとして、いかに意味づけられ、包摂されていったのかを明らかにすることを重視した。なぜなら視聴覚メディアにおいて「子供」と社会の関係は、深く追究されないままの状態だったからである。こうした視座は、軍国主義／民主主義下の映像メディアを媒介に、いかにイデオロギーが形成されていったのかを異なる視点から浮かび上がらせ、戦中・戦後の文化研究に寄与することができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate how "children" in Japanese movies were historically represented and received from 1940s to 1950s. By doing so, I analyzed how "children" were mobilized to implant the ideology of wartime nationalism and postwar democracy.

I collected and archived moving pictures from prewar to wartime, and investigated primary materials and magazine articles about children. In particular, I analyzed the unique expression by Hiroshi Shimizu's movies, which depicted children vividly from the wartime period. The result of research was presented at the Japan Society for Cinema Studies under the title of "Image of Postwar Democracy in the Media: How were "Children" Visualized?"

研究分野：映像文化論

キーワード：子供 清水宏 イデオロギー メディア ナショナリズム プロパガンダ 国策映画 戦後民主主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでプロパガンダ研究や戦後研究で重要な役割を果たしてきたのは、歴史学や政治学、社会学であり、芸術学がこうした問題に取り組んだのは主にカルチュラル・スタディーズなどの影響を受けてからのことであった。さらに、映像メディアにおけるイデオロギー分析でもナショナリズムの分析でも、「女性」がどのように表象され、時代の規範を体現しているのか、すなわち、男性のイデオロギーに「女性」がいかにジェンダー化されてきたのかが中心であった。「子供」を対象とした研究は、教育社会学など特定の学問領域に限られ、当時、大衆に思想を植え付けるメディアとして、もっとも強力に作用していた映像作品では、徹底的に「子供」の表象をめぐる問題は見過ごされてきたのである（「子供」とは一般的に18歳以下の者を指すが作品によっては親の保護下にある大学生なども含む）。

たとえば、樋口尚文(2017)は「昭和の子役」に焦点をあて、「もうひとつの日本映画史」を記述しようとした。年代別に整理された子役の紹介や、子役でデビューした6名の俳優にインタビューを実施しており、きわめて重要な資料となるものの、戦時下のファシズムや戦後民主主義のもとで「子供」が担った政治的役割や文化的意味に関しては関心を向けていない。また川本三郎(2000)は、美空ひばりを対象に彼女が戦後民主主義社会の明るさを体現した「働く子ども」として銀幕で社会を反映していたことを分析している。だが、あくまでも子役スターであった美空ひばり自体の批評であり、そうした役割が必要となる時代背景や文化的な要因の考察は十分になされていない。したがって、視聴覚メディアにおいて「子供」と戦時期・戦後社会の関係は、深く追究されないままの状態だった。申請者の関心は、大衆娯楽の頂点にあった映画の物語において、「子供」がいかに意味づけられたのかにある。

2. 研究の目的

本研究では、大衆娯楽として国民を主体化させるための強力な文化装置であった映画において、ナショナル・アイデンティティの形成に「子供」の表象がどのような役割を担っていたのか、という「問い」を設定することによって、戦時期から戦後にかけてのナショナル・アイデンティティの変容と連続性を捉えたい。さらにそれは、女性表象とどのような関係を取結びながら国民国家を形成したのかというジェンダー表象の問題とも密接に関わっている。

本研究は、これまでの戦中・戦後の文化研究に異なる視点からの分析で貢献したいと考える。この時期におけるこれまでの文化研究は、映画作品であれば物語分析や女性表象、雑誌メディアであれば、とりわけ女性イメージをめぐる紙面分析や言説分析が中心であった(若桑 1995)。しかしながら、ジェンダー化される前の「無垢」な子供の身体が、総力戦体制や戦後民主主義の伝達のためのイデオロギーにいかにも利用され包摂されていったのかを歴史的な視点から明らかにすることは、知識社会学などでは見えてこない大衆文化を捉える点においても学術的な独自性をもっている。

3. 研究の方法

これまでの研究は、戦後の思想形成に強く影響を与えた教育映画を単なる「記録」として捉えて占領政策や受容の側面を明らかにしてきた。それに対して本研究は、そういった映像を「映画」=芸術として捉え、どのように映像テキストが構成され、美学的な効果を発揮しているかを重視して映像テキストの分析をする。なぜならば戦後、とりわけ占領期の日本人は、アメリカによる民主化政策の一環として製作・上映された啓蒙映画やCIE映画に娯楽的要素も見出しながら、「文化の源泉」としてアメリカの家族、女性、子供のあり方を享受

してきたからである。本研究では、社会学や歴史学のみの方論にとどまらず、芸術学としてのフィルム・スタディーズの方論も組み合わせながら、戦時期や占領期の政策・映画製作・映画受容の循環構造を分析していく。

もともと申請者は、大衆の欲望の象徴的存在である映画スターがいかなる価値づけのもとで言説を構成しているのかを分析してきた。なかでも焦点化したのは女性表象であり、軍国主義から民主主義へと変遷する政治的な転回のなかで要請された理想的な女性イメージを中心に研究してきた。そこで明らかにしたことは、1945年の敗戦による思想的「断絶」ではなく、1940年頃から1950年代中頃にかけての時代を象徴するアイコンへの「連続」する欲望のあり方、そして1950年代後半に見られるその変容であった。

本研究では「子供」に焦点をあて、その議論が成立するのかを再検証するとともに、女性表象とジェンダーの関係からは導きえなかった議論も抽出したいと考えている。申請者は映画研究で主流だった作家主義的なテキスト分析に対して距離を取り、徹底して映画を大衆文化のなかで捉えようとしてきた。本研究でも作家を基準にした作品の選定はせず、人気の高かった映画を分析の中心にする。したがって、1940年から1960年頃までの映像資料のテキスト分析、さらに日本人観客の受容を調査するための同時期に発行されていた雑誌メディアの言説分析をすることによって、ジェンダー・セクシュアリティ規範だけではなく、「子供」という身体にいかにナショナル・アイデンティティが埋め込まれているのかを明らかにする。

4. 研究成果

本研究は、戦時期から戦後にかけて、日本映画において「子供」がいかに表象され、どのように受容されたのかを歴史的に調査することによって、戦時期のナショナリズムや戦後民主主義の思想体系に「子供」がどのように組み込まれていったのかを明らかにすることを目的としたものである。1年半という短い期間であったため、戦時中を主とした研究になった。ジェンダー化される前の「無垢」な子供の身体が、総力戦体制のイデオロギーにいかん利用され包摂されていったのかを分析するため戦前から戦中にかけての映像資料の収集をおこなった。該当時期における一次資料のアーカイブをRAとともに進め、概ね必要な作品はそろえることができた。

また「子供」について書かれた文献や雑誌の記事の調査を国会図書館を中心に実施した。とりわけ戦中に「子供」を生き生きと捉えた清水宏映画とそれに関わる雑誌の批評言説を収集して分析した。その研究成果として日本映画学会において「メディアにおける戦後民主主義のイメージ：子供はいかに語られたのか」というタイトルで発表した。現在はその場でのコメントを活かし、論文を執筆しているところである。

戦中・戦後に「子供」を主題にした児童映画を多く撮った清水宏は、日常的なリアリズムで日常的な光景を淡々と描写しながらも、単純なコンティニュイティ・エディティングはなく、「省略法」による子供の移動を「想像的アクションつなぎ」で見せたり、水と一緒に描く時に露出オーバーに光を取り込んだりと、かなり映像技法を駆使して子供を純真で躍動感あふれる存在として主体化して描いた。戦中期においては過度な精神主義のもと国策映画やプロパガンダ映画で大人の男女が禁欲的に描かれる一方、清水映画では技法によって子供の純粋さが効果的に演出され、過度な精神主義の時代において、自由や希望を体現し、特権的な役割を担っていた。今後は戦時中の子供の位置付けをより幅広いコンテクストから分析し、清水映画の子供を比較検討する必要がある。さらに清水宏は戦後も独立プロで子

供を主役に児童映画を撮っている。清水の映画における「子供」は戦中と戦後でどのような意味を担ったのかも今後、追究していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kyohhei Kitamura	4. 巻 online website
2. 論文標題 PERSONA: Hara Setsuko	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Media and Popular Culture: An Open-Access Digital Initiative of the University of Tokyo	6. 最初と最後の頁 online website
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 北村匡平
2. 発表標題 メディアにおける戦後民主主義のイメージ： 子供 はいかに語られたのか
3. 学会等名 日本映画学会 第14回全国大会（大阪大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北村匡平
2. 発表標題 壊乱するスクリーン：川島的フレームとフランキー塚の狂騒
3. 学会等名 文学部芸術学科・言語文化研究所共催シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 北村 匡平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 美と破壊の女優 京マチ子	

1. 著者名 川崎公平、北村匡平、志村三代子編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 352
3. 書名 川島雄三は二度生まれる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----